

# 古いアルバート街の物語

脚本 アレクセイ・アルブゾフ

訳 和田豊

脚色 永妻晃

クリスト「クジマー、坐れ、そんなうろろしてないで」

クジマー「それより、どうしてあんな人間とつき合っていられるのか説明してもらいたいね」

クリスト「誰のことだ？」

クジマー「今、ベッドルームで寝ている男だ」

クリスト「男じゃない、お前のオヤジだ……それで、何しに来た？」

クジマー「(攻撃的に)今朝、五十ループルの電報為替が来た。

差出人は、『銀の森のロビンソン・クルーソー』。この善人面してひとをバカにする権利がどこにあるんだ？ いい年こいて悪ふざけばかり」

バリヤース「クジマー、死んだお前のお母さんをふくめ、かつて彼の妻たちは、みんな彼を捨てたんだ」

クジマー「そうさせたのは自分だろ……あいつは誰も必要じゃなかったんだ。あいつの作る人形が生きた人間の身代わりだったんだ。いいか、奴に言っとけよ」

バリヤース「何だ？」

クジマー「絶対あいつより偉くなってみせる！」

クリスト「それだけか？」

クジマー「あいつの出番は終わったんだ。劇団だってもう用はないって言ってるんだ」

バリヤース「(不安に)何の話だ？」

クジマー「『美しきヘレーネ』の人形制作の担当は、ペーチキンに決まったんだ」

バリヤース「誰が言った？」

クジマー「劇団の皆知ってる」

クリスト「ほうー、だからどうした？ そんなつまらん仕事はペーチキンにやらしとけ。いいかお前のオヤジは一流なんだ」

クジマー「……五十ルーブルはロビンソン・クルーソー氏に返しておいてくれ」

クリスト「クジマー、俺はお前のことは子どものころから知っている」

クジマー「分ってるよ、何度とおやじとの間に入ってくれた。なにしろ奴とは生まれた時から敵対関係にあるようなものだからな。未だ許せないんだ！ とくに奴が女どもという時には、もうカツカキちゃう！」

クリスト「(隣室のドアを見て)クジマー、いい子だ、台所へ行こう」

クジマー「どうして？」

クリスト「水ギョーザの作り方、教えてやる」

クジマー「おしまいまで聞いてよ。わたしはおやじに勝たなくちゃならない。おぎゃあと生まれた時から、そう決めたんだよ」

クリスト「何と早熟な」

クジマー「奴は言った、『このガキヤア猿にそっくりだ』って」

クリスト「何という驚愕的な記憶力」

クジマー「母さんから聞いたんだよ」

クリスト「だろうな」

クジマー「わたしは奴の鼻をあかしてやる。絶対に勝って見せる！」

クリスト「クジマー、俺はお前のことは子どものころから知っている」

クジマー「何だよ、さっきから」

クリスト「いいか、ペーチキンのこともよく知っている。ペーチキンはオヤジさんの弟子でオヤジさんを尊敬している……おい、なりすましペーチキン。いいかオヤジさんはもう

歳だ。お前には先がある。『美しきヘレーネ』の仕事はオヤ

「ジさんにやらせてやれ」

クジマー「……」

パジャマ姿のヴィクトシヤが現れる。

クジマー「何だ？ 何だ？ 何だ？ どういうの、これ？ あ

ー、オヤジのパジャマ着て……また女か！」

クリスト「ご紹介する」

クジマー「娼婦か？」

クリスト「ちやう！ 名はヴィクトシヤ、このアパートに知り

合いがいてモスクワから訪ねて来たんだが引越して居な

かった」

ヴィクト「そうなの、泊まるところがなくて困ってたら……」

クリスト「ロビンソン氏が “泊まつてゆけば ” って」

ヴィクト『ロビンソン氏？』

クリスト「いいから、いいから」

ヴィクト「どうなってるの？ そんな泣きそうな顔して、あな

たは誰なの？」

クジマー「(悲嘆にくれて) どうでもいいよ」

クリスト「どうでも言いそうなので、詳しい話は聞かない方が

いいね」

ヴィクト「じゃ、名前は何て言うの？」

クジマー「……」

クリスト「名前ぐらい言ってもいいだろう」

クジマー「……変な名前で、みんな笑うんだ」

ヴィクト「わたしも笑うしら？」

クジマー「笑う！」

ヴィクト「教えて？」

クジマー「言わない！ 笑う！」

ヴィクト「じゃ、聞かない……」

クジマー「クジマーってんだ」

ヴィクト「(即) いい名前じゃない!」

クジマー「……ホントウ?」

ヴィクト「やさしいお母さんだけが、そんな珍しくて女らしい

名前を考えつくのよ」

クジマー「母じゃない、奴だ。バリエースニコフがつけたんだ」

ヴィクト「そうか? ……どうして、すぐに気がつかなかった

んだろう……あなた、お父さんそっくり」

F・O

F・I

クリストをクジマーがいる。

クリスト「で、何だ今日は?」

クジマー「賽さいは投げられたぞ!」

クリスト「お前、劇団に人形のスケッチを持って行ったのか?」

クジマー「ああ、上手くいったよ、最高の出来だ。支配人も大

喜びだ、全ては決まった……奴はいるかい?」

クリスト「……古きアルバート街の散歩に出かけた」

クジマー「こんなどしゃ降りの雨の中を、あの女とか?」

クリスト「彼女は、おやじさんに良い影響を与えている。あん

なに楽しそうに仕事するのは久しぶりだ。情熱の炎で火事

になっちゃったって感じだな。ちょっと心配なくらいだよ」

クジマー「女と奴は上手くいってるみたいだな」

クリスト「ヴィクトーシャとはほとんど口も聞いていない。

このどしゃ降りの中を散歩に出かけたのは、今朝仕事を終

わったからだ。疲労困憊ひろうこんばいぶつ倒れるところだった」

クジマー「何の仕事?」

クリスト『美しきヘレーネ』の人形制作だ」

クジマー「だってそれは?」

クリスト「別にかまわないだろう？」

クジマー「完成したの……」

クリスト「ああ、見るか？」

クジマー「……」

クリスト、窓から外を覗き、

「お、帰って来た……」

クジマー「クリスト、決心したよ！ 今日は何もかもぶちまで

てやる！」

クリスト「何を？」

クジマー「人形のこと、わたしが勝ったことを劇団から聞いた

ら、奴はショックで死んじゃうかもしれないからな。わた

し自身の口から言ってやる」

クリスト「……ま、いいだろう。クジマー、おだやかにな」

クリスト、ドアを開けに行く。

バリヤースとヴィクトーシャが入って来る。

ヴィクト、バリヤースに、

「あなたって、水たまり跳び越すのうまいのね。エッ？

分かったわ」

クリスト「どうしたんだ、バリヤースはいきなり台所に行って」

ヴィクト「ちよっとね」

クジマー「じゃ」

クリスト「どうした？」

クジマー「帰る」

ヴィクト「ちよっと待って、外は雨、みんなとお茶でも飲んで

雨の止むのを待つ……どう？」

クジマー「でも……」

ヴィクト「クジマーは喜んでお茶に付き合うって」

クリスト「親父さんな、お前が来てくれると本当はうれしいん

だよ」

ヴィクト「そうよ、『今日は特別な日だから。俺様が世界一のおいしい紅茶をいれてやる』って、それと、『例のペーチキンはどうしてるかな、あの若き才能は?』って」

クジマー「ペーチキンが気になるんだ?」

クリスト「『本当の所はね……』」

ヴィクト「お父さんね、『自分の娘がペーチキンなんかに出し抜かれた』って、怒ってるのよ」

クジマー「まさか?」

ヴィクト「そうだ……いいもの見せてあげる……ほら、あそこ……クリスト」

クリスト「……よし」

クリスト、棚に近づき布を取る。

ヴィクト「どう、『美しきヘレーネ』」

クリスト「素敵だろ……バリアースの精神込めた作品だ」

ヴィクト「衣裳担当はあたし……可愛いでしょ……ちよつと待って?」

クリスト「どうした?」

ヴィクト、人形に近づき、

「これ……クジマーの顔じゃない?!」

クリスト「……」

クジマー「……」

クジマー、人形に近づき凝視する。

みるみる顔が強張る……と、ドアに向かう。

クリスト「何処へ行くんだ?」

クジマー「ペーチキンに言ってるんだ! あいつなんか全

然取るに足らないって」

クジマー、去る。

クリストとヴィクト、クジマーを見送る。

